

夏期（6月から9月） の熱中症による救急搬 送状況

救急企画室

1 はじめに

平成25年の夏は、猛暑日（1日の最高気温が35℃以上になる日）の日数が平年を上回る地点が多数となり、また、猛暑日の継続日数を更新した地点が複数観測される等、全国的に猛暑となりました。特に、8月12日には高知県四万十市において最高気温41.0℃を記録し、観測史上の最高気温を更新しました。

消防庁では、近年の温暖化や夏の猛暑等の異常気象に伴い、熱中症の発生が問題になっていることから、平成20年より7月から9月までの期間の熱中症による救急搬送状況について調査を開始し、さらに、平成22年からは、調査期間を6月から9月（以下、夏期と言う。）に拡大し、週間の速報値及び月間の確定値を公表してきました。

このたび、平成25年夏期の熱中症による救急搬送状況を取りまとめ、平成22年以降の状況についても公表したので、概要を報告します。

2 熱中症による救急搬送人員数（図1）

平成25年夏期の熱中症による救急搬送人員数は、5万8,729人でした。これは、昨年と比較し約1.3倍（1万3,028人増）で、これまで最多であった平成22年の5万6,119人を上回る搬送者数となりました。

平成25年の月別の救急搬送人員数をみると、6月は4,265人、7月は23,699人、8月は27,632人、9月は3,133人となっており、7月と8月は救急搬送される人が多くなっています。また、他の年も同様に、7月と8月の搬送者数が多く、9月に入ると急激に減少していることがみてとれます。

3 年齢区分別搬送人員数（表1）

平成25年の夏期の年齢区分別¹の熱中症による救急搬送人員数は、高齢者が2万7,828人（47.4%）で最も多く、次いで、成人2万3,062人（39.3%）、少年7,367人（12.5%）、乳幼児466人（0.8%）となっています。高齢者の熱中症による救急搬送は、全年齢区分の約5割を占めており、他の年も同様の傾向を示しています。

1 年齢区分
 新生児：生後28日未満
 乳幼児：生後28日以上7歳未満
 少年：7歳以上18歳未満
 成人：18歳以上65歳未満
 高齢者：65歳以上

4 傷病程度別搬送人員数（表1）

平成25年の夏期の傷病程度別²の熱中症による救急

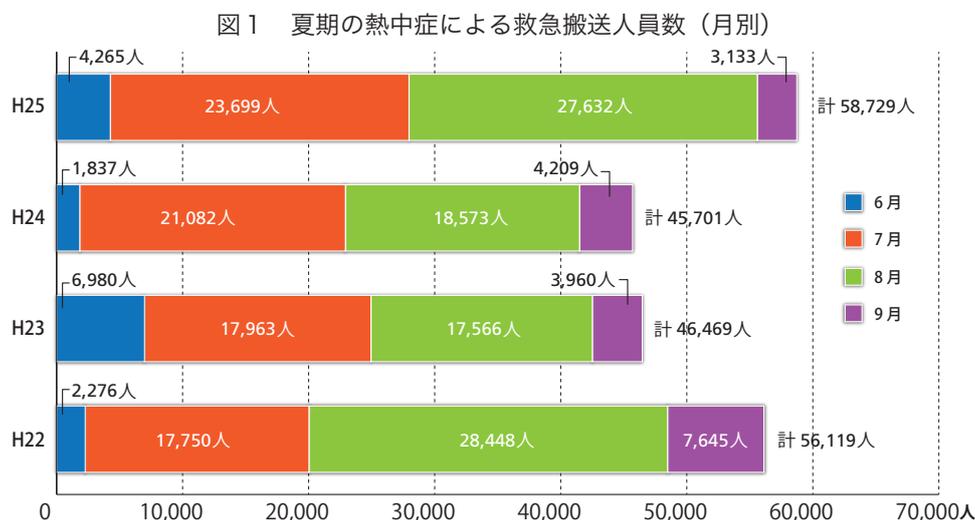
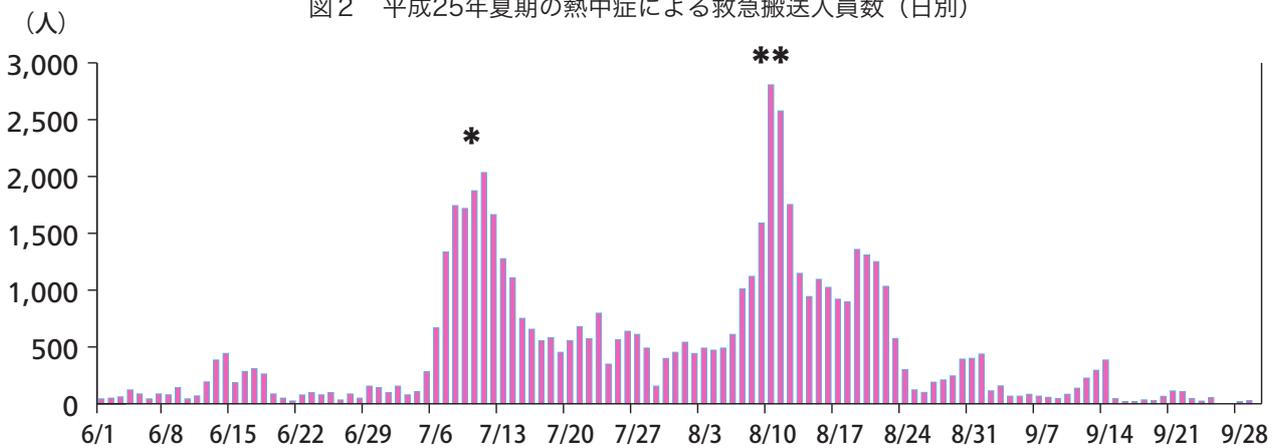


表1 夏期の熱中症による救急搬送人員数（年齢区分別・傷病程度別）

	年齢区分（人）						傷病程度（人）					
	新生児	乳幼児	少年	成人	高齢者	合計	死亡	重症	中等症	軽症	その他	合計
H22	0 (0.0%)	489 (0.9%)	6,331 (11.3%)	23,324 (41.6%)	25,975 (46.3%)	56,119 (100.0%)	171 (0.3%)	1,848 (3.3%)	19,608 (34.9%)	32,709 (58.3%)	1,783 (3.2%)	56,119 (100.0%)
H23	0 (0.0%)	442 (1.0%)	6,182 (13.3%)	18,847 (40.6%)	20,998 (45.2%)	46,469 (100.0%)	73 (0.2%)	1,134 (2.4%)	15,240 (32.8%)	28,946 (62.3%)	1,076 (2.3%)	46,469 (100.0%)
H24	5 (0.0%)	412 (0.9%)	6,467 (14.2%)	18,192 (39.8%)	20,625 (45.1%)	45,701 (100.0%)	76 (0.2%)	980 (2.1%)	14,736 (32.2%)	29,426 (64.4%)	483 (1.1%)	45,701 (100.0%)
H25	6 (0.0%)	466 (0.8%)	7,367 (12.5%)	23,062 (39.3%)	27,828 (47.4%)	58,729 (100.0%)	88 (0.1%)	1,568 (2.7%)	19,754 (33.6%)	36,805 (62.7%)	514 (0.9%)	58,729 (100.0%)

図2 平成25年夏期の熱中症による救急搬送人員数（日別）



搬送人員数は、軽症が3万6,805人（62.7%）で最も多く、次いで、中等症1万9,754人（33.6%）、重症1,568人（2.7%）、死亡88人（0.1%）でした。経年の傷病程度別の割合をみても、同様の傾向にあることが分かります。

初診時死亡者数については、当時、記録的な猛暑と言われた平成22年の171人に比べ、平成25年は88人で、83人（48.5%）減少しています。

2 傷病程度

- 軽 症：入院を必要としないもの
- 中等症：重症または軽症以外のもの
- 重 症：3週間の入院加療を必要とするもの以上
- 死 亡：医師の初診時に死亡が確認されたもの

5 日別搬送人員数（図2）

平成25年夏期の日別の熱中症による救急搬送人員数をみると、搬送人員数が増加する2つの山がみられました。1つ目の山（*）は、7月6日以降の九州から関東にかけて平年より早く梅雨明けした直後からで、2つ目の山（**）は、8月7日から22日にかけて、連日、全国で猛暑となる等、厳しい暑さが続いた期間でした。

これらのことから、熱中症の発生要因は、急激な気温の上昇や高温の長期間化等、気温条件も一因であること

が分かります。

6 おわりに

近年、熱中症について社会的関心が高まっており、行政においても様々な取組がなされています。これらの取組等により、「熱中症」の認知度も高まり、その予防や応急手当等についても、広く一般に知られつつあります。

熱中症は、重症になると生命にかかわる病気ですが、暑さを避けたりこまめな水分補給をしたり、十分な休息をとる等の対策をしっかりと行うことにより予防が可能です。

消防庁では、これからも関係省庁と連携をとりながら、熱中症に関する注意喚起や情報提供を行っていきます。

参考：1）夏（6～8月）天候：気象庁

<http://www.jma.go.jp/jma/press/1309/02c/tenko130608.html>

2）平成25年夏期（6月から9月）の熱中症による救急搬送の状況（総括）：消防庁

http://www.fdma.go.jp/neuter/houdou_01/houdou25nen.html

問い合わせ先

消防庁救急企画室 伊藤
TEL: 03-5253-7529